

三加和町文化財調査報告 第8集

田中城跡

VIII

1 9 9 4

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

三加和町文化財調査報告 第8集

田中城跡

VIII

1 9 9 4

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

序

吉野ヶ里遺跡が高松塚古墳の装飾壁画発見以来とっていいほどの全国的な考古学ブームを引き起こすと、それまでは開発を推進する上で厄介者扱いだった埋蔵文化財を町おこし・村おこしに生かす自治体が九州で増加し、平成4・5年の二年間でその数は38市町村にも上がっているそうです。三加和町では、昭和61年度から田中城跡の発掘調査を継続し、並行して平成元年度からは整備にも取り組んでいます。発掘調査では毎年新しい発見があっており、今年度は、県内に約600近くあるといわれる中世城で初めて石^{せき}竈^{がん}が発見され、城に伴う宗教施設ではないかと注目を集めました。また、併せて石切り場も発見され、その中には中世までは^{さかのほ}遡らないだろうと言われていた矢の痕も、はっきりと確認されました。

毎年、わずかの面積の調査ですが、継続することによっていろいろなことが解ってきています。これも専門調査委員の先生方や地元の方々の協力があればこそと感謝しています。

調査と共に、整備の方も当分の間継続していきますので、変わらぬご支援とご協力をお願いいたします。

平成6年3月31日

三加和町教育長 坂梨 五十鈴

例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成5年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物および遺構の実測・製図・写真撮影拓本は黒田が行った。
4. 遺構については、専門調査委員のご教示を得た。
5. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆・編集は黒田が行った。

本文目次

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査経過	2
第Ⅱ章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	7
Ⅰ 区	
(1)遺 構	7
①柱 列	7
②石切り場	7
③石 龕	9
・ 1号石龕	9
・ 2号石龕	10
(2)遺 物	13
Ⅱ 区	
(1)遺 構	13
①溝	13
②集 石	14
(2)遺 物	15
第Ⅲ章 まとめ	18

挿 図 目 次

第1図 田中城跡全体図	4
第2図 I区遺構配置図	5
第3図 石切り場実測図	8

第4図	1号石竈実測図	9
第5図	2号石竈実測図	10
第6図	Ⅱ区遺構配置図	11
第7図	Ⅰ区出土遺物実測図	13
第8図	集石実測図	14
第9図	Ⅱ区出土遺物実測図－1	15
第10図	Ⅱ区出土遺物実測図－2	16

写 真 図 版 目 次

図版1	(1)Ⅰ区調査前（東より） (3)Ⅰ区遺構発掘状況	(2)Ⅰ区柱列発掘状況（北東より） (4)Ⅰ区白磁出土状況
図版2	(1)1号石竈（南西より） (3)2号石竈と石切り場（南より）	(2)2号石竈（南より） (4)石切り場（西より）
図版3	(1)石切り場の切り出し状況 (3)石切り場の工具痕	(2)石切り場の壁面調整 (4)石切り場の工具痕
図版4	(1)Ⅱ区調査前（北より） (3)Ⅱ区集石検出状況（北より）	(2)Ⅱ区遺構発掘状況（北より） (4)Ⅱ区青磁出土状況

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経過

『辺春・和仁仕寄陣取図』によると城の西側に和仁側の建物群と思われるものが描かれているところから、昨年度はその場所を推定して調査を実施した。調査の結果、建物跡と思われる柱列は確認されたが、従来の調査で確認されていた掘立柱建物跡とは全く趣を異にするものであった。大小二種類の柱穴が23列、整然とほぼ平行に、調査区全面で確認された。いろいろな問題点はあるものの、一応和仁側の建物跡であろうということで、まとめていた。今年の7月31日～8月2日まで愛知県豊田市で開催された第10回全国城郭研究者セミナーで参加者の意見を聞いてみたが、このような遺構はおそらく初めての確認ではないかということで、どのような性格のものか全く見当が付かないというのが大方の意見であった。

そこで、今年度はこの遺構の性格が何とかつかめないものかと、昨年調査区の南側に続く平坦部を調査することにした。また、さらにもう一筆南側の畑が、平成3年度に調査を行い、5列の柱列が確認された部分と隣接するところから、併せて調査を行うこととした。

第2節 調査組織

調 査 主 体 三加和町教育委員会

調 査 責 任 者 坂梨五十鈴（教育長）

調 査 事 務 小山 暁（社会教育課課長）

荒木 和富（社会教育主事）

調 査 員 黒田 裕司（社会教育課主事）

専門調査委員 岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館教授）

大三輪龍彦（鶴見大学教授）

田邊 哲夫（日本考古学協会・玉名歴史研究会代表）

北野 隆（熊本大学工学部教授）

阿蘇品保夫（熊本県立美術館教育審議員）

大田 幸博（熊本県文化課参事）

発掘作業員 齋 浅代・齋 邦代・齋 サカエ・福原 房子・福原スミ子

発掘協力者 石井 進（東京大学名誉教授・国立歴史民俗博物館館長）・工藤 敬一（熊本大学文学部長）・松本 健郎（県文化課主幹）・前川 清一（県

文化課参事）・中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）・坂本 重義
（南関町教育委員会）・五嶋 竜山（鹿山焼竜山窯）・吉永 武福（地
権者）

第3節 調査経過

- 4月19日 玉名郡退職教員見学。（8名）
- 5月10日 横島町文化財保存顕彰会見学。（60名）
- 5月22日 春富小学校PTA委員研修。（24名）
- 6月8日 熊本大学国史研究室見学。（20名）
- 6月18日 14日から降り続いた雨により、10箇所が崩壊。管理道路の崩壊は幅20m、高さ10数mにもおよび下の水田まで達しているため、車による通行が不可能となる。また、遊歩道の一部も崩落しているため、歩いての見学も注意が必要となった。
- 7月31～ 愛知県豊田市で開催された第10回全国城郭研究者セミナーに参加。昨年度の
- 8月2日 調査で確認された遺構について参加者の意見を聞いたが、よく解らないという意見が大半で、今後の研究課題ということになる。
- 8月9日 平成5年度発掘調査開始。
調査区が二筆のため、北側をⅠ区・南側をⅡ区とし、Ⅰ区から調査を開始。ただし、Ⅰ・Ⅱ区が離れているため、Ⅰ区の西半分を掘り、東半分は排土場とする。
- 8月31日 今月中旬過ぎまで雨が降り続いたが、後半になりようやく天気も回復し、作業が進み出す。
- 9月1日 玉東町健康づくり推進委員・健康を守る婦人の会見学。（80名）
- 9月8日 遺構確認作業を始める。
- 10月12日 三加和史跡愛好会10月例会で、昨年度までの調査結果について報告。
（19名）
- 10月19日 確認された遺構は、1列の柱列と数基の不定形土壌のみ。
- 10月20日 遺構の発掘にかかる。
- 10月25日 西合志町高齢者学級見学。（30名）
- 10月26日 遺構を掘り終えたが、深さ約20cmで岩盤の凝灰岩となり、さらに、この凝灰岩にも土壌状の凹が見られるため、もう一段掘り下げて確認することにする
- 11月4日 Ⅱ区北側の表土剥ぎを開始。南側を排土場とする。
- 11月9日 松本健郎県文化課主幹・前川清一県文化課参事、現地指導。

- 11月15日 全く遺構が確認されず、もう一段掘り下げてみることにする。
- 11月24日 ようやく遺構面に達したようで、柱穴がわずかだが確認された。遺物の出土量も増加。
- 11月25日 鉄砲玉出土。
- 11月26日 I 区の遺構の縁や土層断面をとるために残しておいた部分が破壊される。子供のいたずらかと思われ、今後の対応を考える必要がある。取りあえず、II 区は後回しにして I 区の清掃をし、もう一枚下の凝灰岩に掘り込んでいる遺構を掘ることにする。
- 11月27日 山鹿市立博物館考古学講座生見学。(5 名)
- 12月 2 日 矢部町公民館支館長見学。(18 名)
凝灰岩面を大まかに均したあと、若干の掘り込みを入れている部分が数箇所見られるが、性格については全くつかめない。
- 12月 3 日 北側斜面下にある遺構は、他の遺構とは性格が異なるようで、内部が二段構造になっている。
- 12月 6 日 宇城文化財研究会視察。(9 名)
- 12月15日 II 区北半分の遺構確認終了。溝遺構・柱穴など確認。
- 12月16日 遺構発掘開始。土師器・青磁など出土。

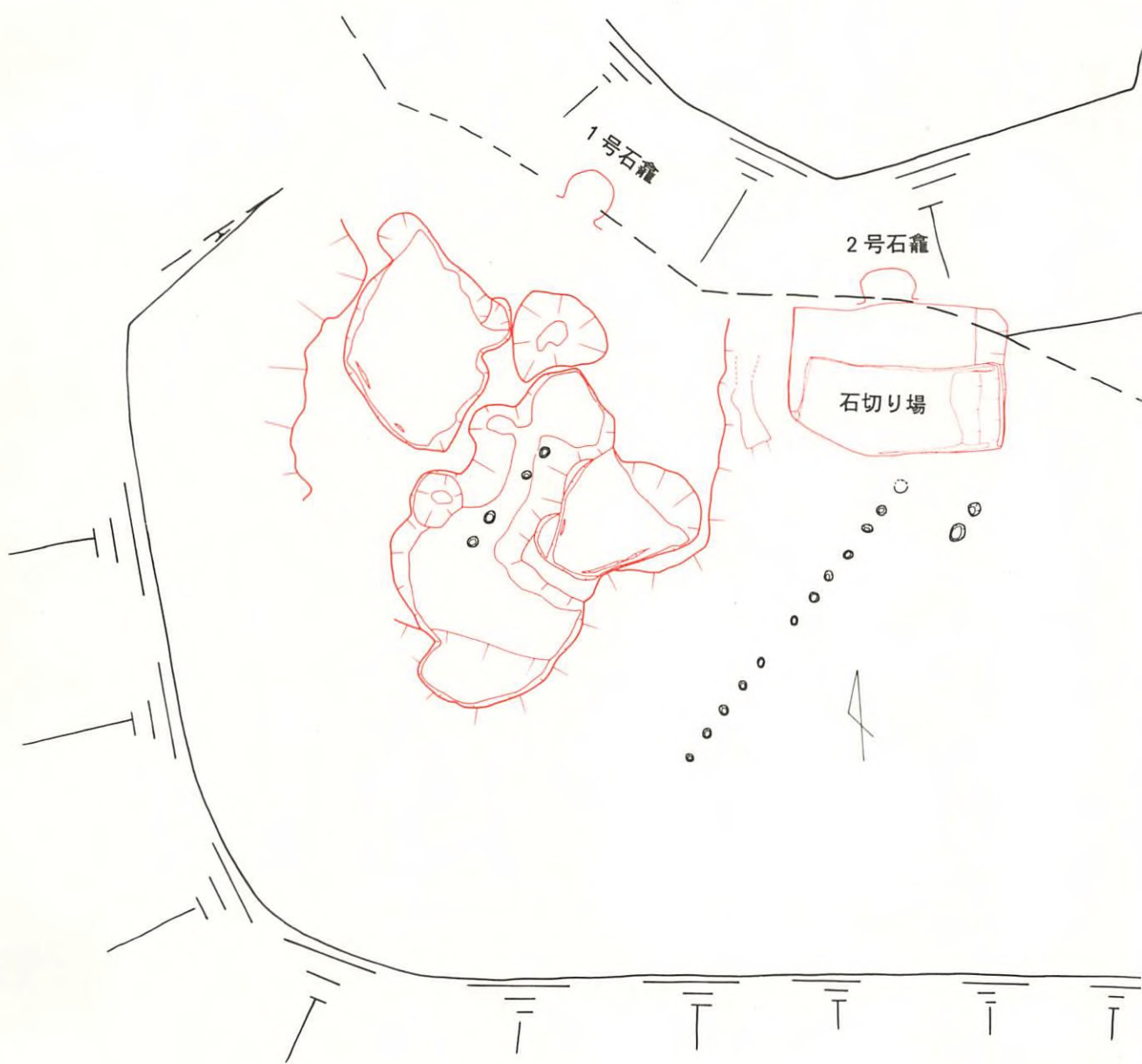
平成 6 年

- 1 月 6 日 I 区遺構実測開始。
- 1 月19日 田邊哲夫先生来跡。
I 区西側半分埋め戻し開始。
- 1 月20日 大田幸博県文化課参事、杉村彰一県立北高校教諭来跡。
- 1 月21日 北野 隆熊本大学工学部教授来跡。
大田・北野先生から何らかの宗教関係施設ではないかとの指摘を受ける。
- 2 月 7 日 I 区東側半分表土剥ぎ開始。
- 2 月17日 田浦町教育委員会視察。(11 名)
- 2 月18日 松橋町教育委員会・文化財保護委員視察。(10 名)
- 2 月25日 出宮徳尚・乗岡 実(岡山市教育委員会)両氏視察。
- 2 月28日 芦北町議会議員視察。(4 名)
- 3 月 8 日 大三輪龍彦鶴見大学教授視察。
崖面に掘られている横穴二基は竈と思われ、手前に掘られている遺構は石切り場ではないかとの指摘を受ける。
- 3 月10日 岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授視察。

久木野村教育委員会・文化財保護委員視察。(5名)

3月27日 山崎龍雄福岡市教育委員会文化財主事視察。

— 4 —



赤 — 古い遺構

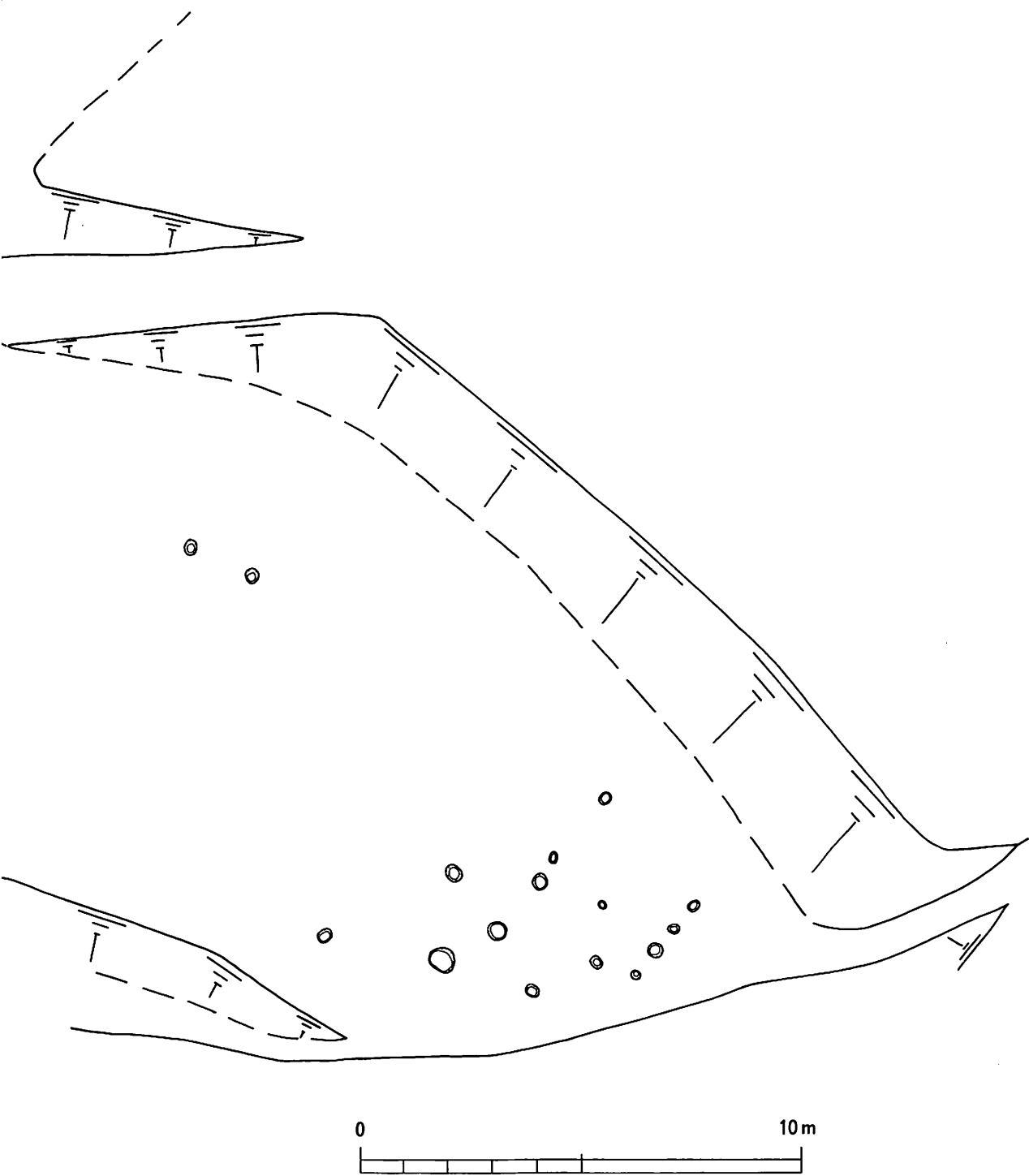


図 I 区遺構配置図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査区は昨年同様、二筆の畑に分かれているため、Ⅰ区・Ⅱ区として調査を行うことにした。しかし、二筆が離れているため両調査区とも半分を調査し残りを排土場にするという方法を取らざるを得なかった。

まず、Ⅰ区の西半分から調査を開始した。この部分は以前から「ドンドンと音がする」とか「雪が積もらない」と地権者から聞いていたので、井戸のような空洞部分があるのではないかと推定されていた。表土を剥ぐと深さ約30cmで、柱列2列と不定形土壌数基が確認されたが、建物跡や当初から予想していた井戸などは確認できなかった。遺構は深さ約20cmで地山の凝灰岩となり、この凝灰岩にも別の遺構が掘られており、二時期が確認されたことになった。

次にⅡ区の北半分の調査に移り、Ⅰ区の遺構実測を行っていたところ、上面で確認された遺構および土層断面実測のため残しておいた部分が破壊されてしまい、やむなく凝灰岩の面まで掘り下げる作業を優先して行った。この面では、不定形に掘り凹めた遺構や内部を二段に掘った遺構（後に石切り場と判明）・竈などが確認された。

この後、ようやくⅡ区の調査に移り溝遺構・柱穴のほか集石1基を確認した。溝は、かなり切り合っており、数度の掘り直しがあつたと推測され、柱穴は建物跡を形成するようなつながりは見られなかった。

そして再びⅠ区に戻って、東半分の調査を行い若干の柱穴を確認した。

第2節 遺構と遺物

・Ⅰ区

(1)遺構（第2図）

柱列・石竈・石切り場などの遺構が確認されたが、切り合いなどからそれぞれ時代が異なると思われる。

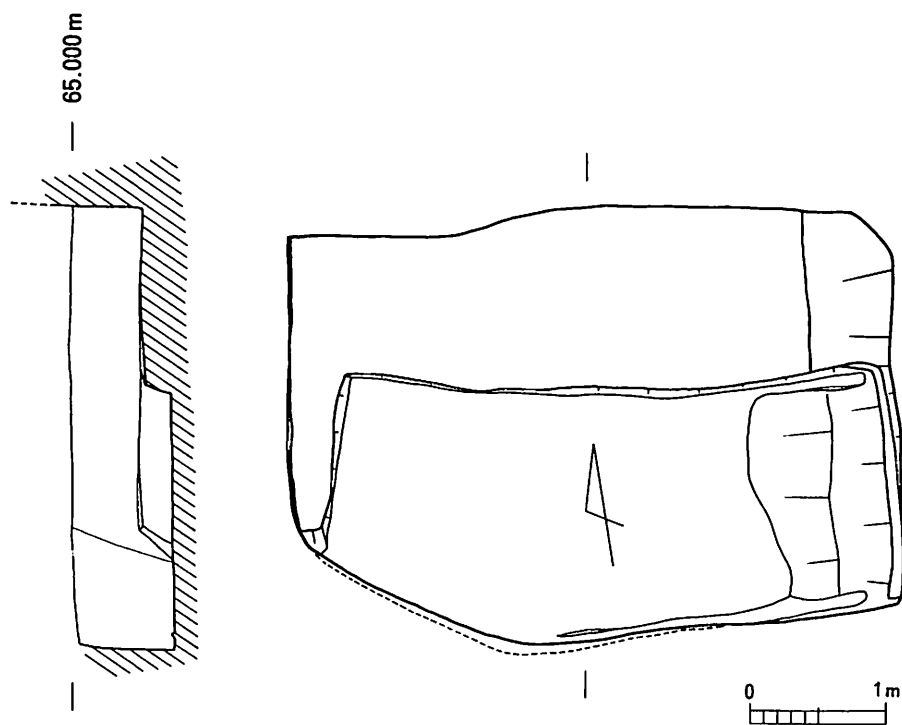
①柱列

2列の柱列が確認された。4個と12個の柱穴からなり、昨年度までの調査で確認された柱列同様約60～70cm間隔で整然と並んでいる。深さは10数cmと浅く、かなり削平を受けているようである。

②石切り場（第3図）

長辺約4.5m、短辺約3.4mのほぼ長方形で、深さは約53～90cm。底面は二段に分かれて

おり、少なくとも二回にわたって石を切りだしたと思われる。切りだした石の大きさは、幅約70cm、厚さ約30～53cmで、最初に切りだした長さは1.6～3.4m、二度目は約1.8mと推測できる。工具痕は幅約3.5cmのものが、約15cm間隔で整然と並んでいる。この工具痕は岩盤から切り離すために斜めに打ち込まれており、その際の摩擦のため磨いたようにツルツルして光沢がある。この他、縦方向に打たれた工具痕・周囲の調整のための工具痕・最初の切り出しの際の工具痕などいろいろな痕跡が残っている。なお、今回図示しているものは工具痕を見つける以前のもので、取り直した図は今後何らかの形で発表する予定である。



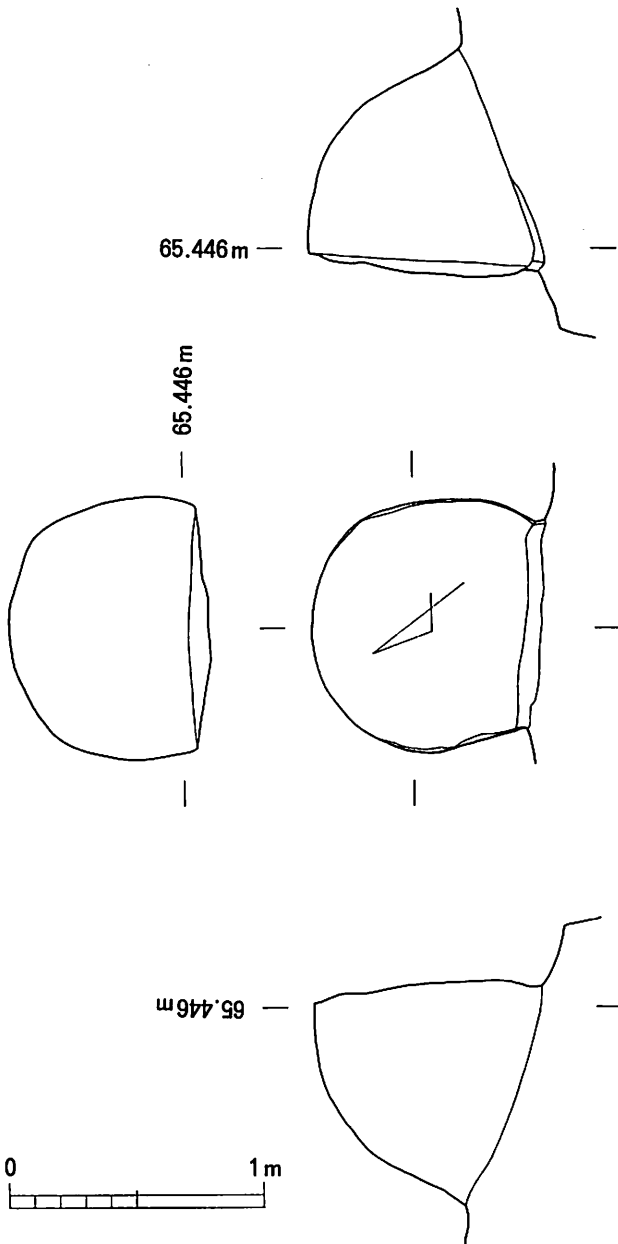
第3図 石切り場実測図

③^{せきがん}石 竈

調査区の北側に、南西向きに凝灰岩の崖面が続いており、この崖面に以前から地元の人たちが「イモ穴」と呼んでいる穴が2基見られた。当初は、半ば埋まったうえ草に覆われていたため無視していたが、専門調査委員の竈ではないかとの指摘で調査を行い、西側から1号・2号とした。

・1号石竈（第4図）

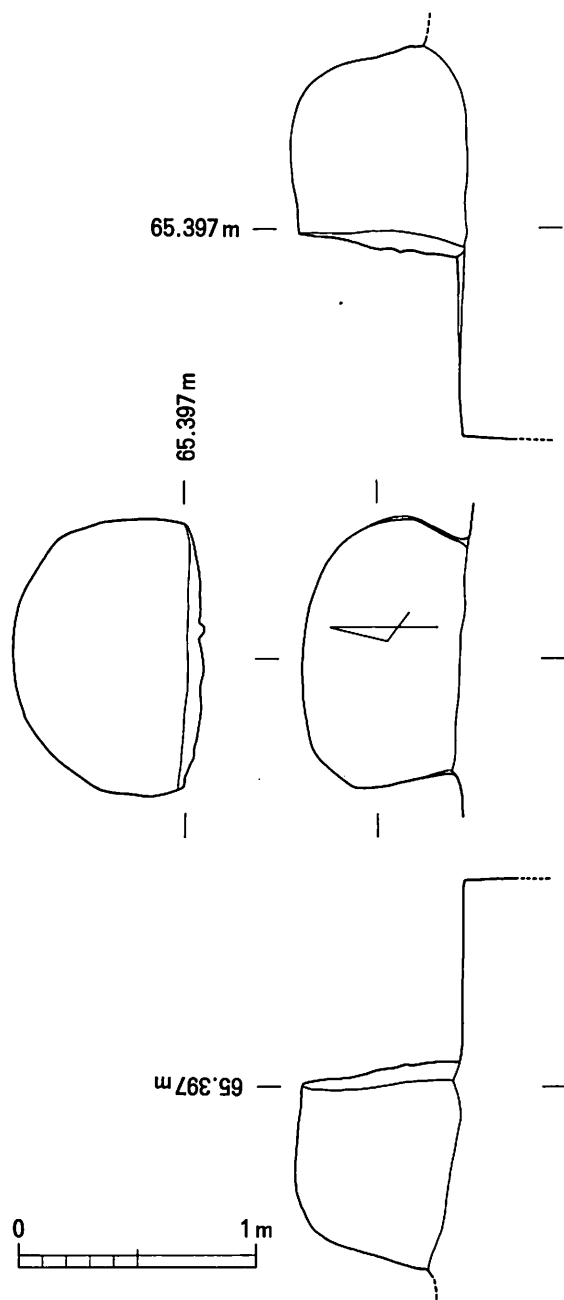
主軸をほぼN38°Eに取る。奥行89cm、最大幅98cm、最大高約90cmで平面形は円形に近く、断面はドーム型である。最大幅は中央部に、また最大高は開口部に持つ。床面は、ほぼ平らであるが、開口部でやや上がっており、はっきりと区切りを設けているようにも思える。作りは全体的に丁寧で、細かく整形しているようである。開口部の外側下部には、祭壇を思わせるような段が一段設けられているがこれが祭壇になるのか、後世に作られたものかは判断がつかなかった。



第4図 1号石竈実測図

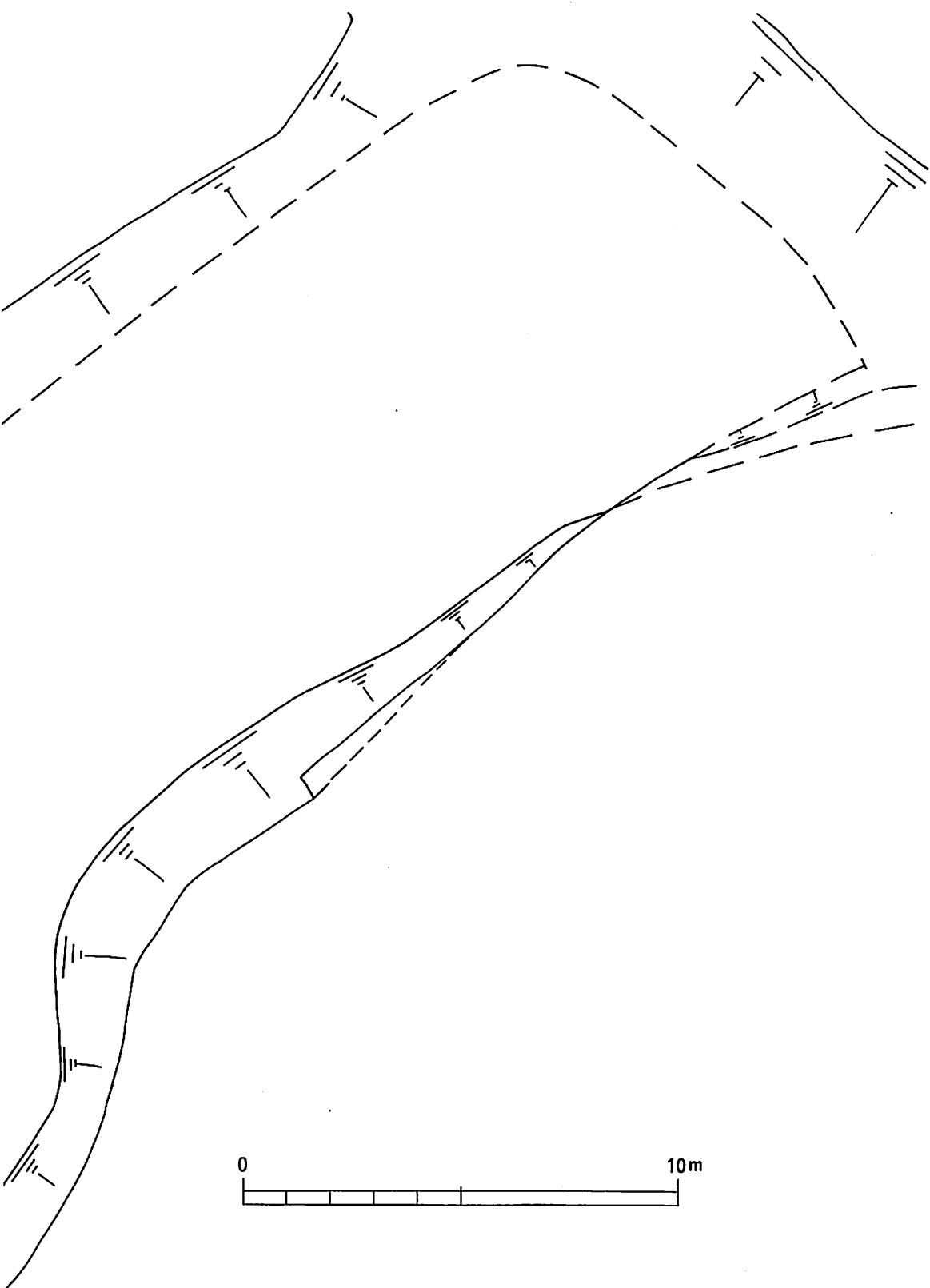
・ 2 号石 龕 （第 5 図）

主軸をほぼN-Wに取り、残存奥行66cm、最大幅101cm、残存最大高87cmである。開口部は後世の石切りのために削られており、実際はもう一回り大きかったと思われる。平面形は、残された部分でみるとほぼ楕円形をしており、断面は蒲鉾型である。床面は開口部に向ってやや傾斜している。作りは1号同様丁寧である。



第 5 図 2 号石龕実測図





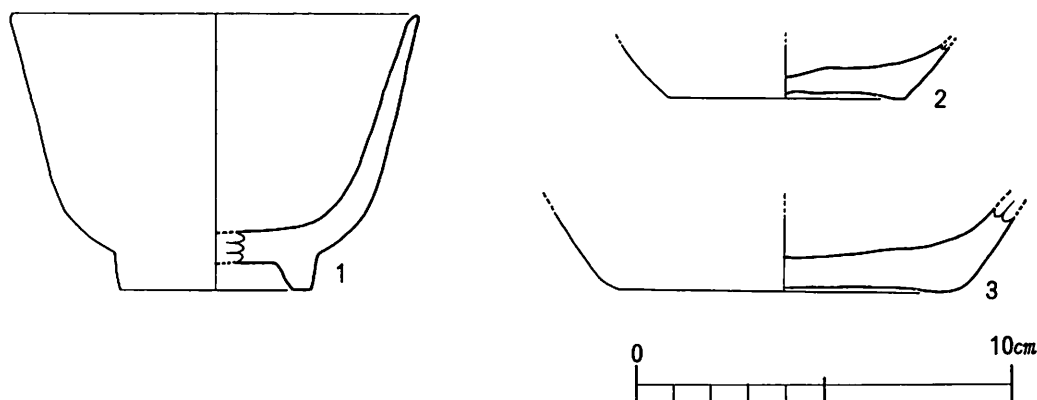
第6図 II区遺構配置図

(2)遺 物 （第7図）

図化できるような遺物は、わずかしかな出土しなかった。

1は白磁碗で、約半分を残す。口径10.7cm、器高7.3cm、高台径5cm、高台高1cmで、
畳付き部以外には薄く白色の釉がかかっている。胎土にはやや大きめの砂粒を含み、焼成
の際に溶けたのか、器面に多数の小さなくぼみがある。全面に貫入がみられる。

2・3は土師器の皿。2は推定底径6.3cm、残存高1.4cmで口縁部をわずかに欠く。外面
は灰褐色、内面は明褐色で雲母・石英などのわりと大きめの粒を多量に含む。底部から直
線的に立上っており、底部の整形ははっきりしない。3は推定底径8.6cm、残存高2.0cm
で口縁部を欠く。内外面とも赤褐色で、細かな砂粒を含む。底部から丸味を帯びて立上
がる。底部の整形は不明。



第7図 I区出土遺物実測図

II 区

(1)遺 構 （第6図）

多数の柱穴・溝などが確認されたが、柱穴には建物を構成するようなつながりはみられ
なかった。

①溝

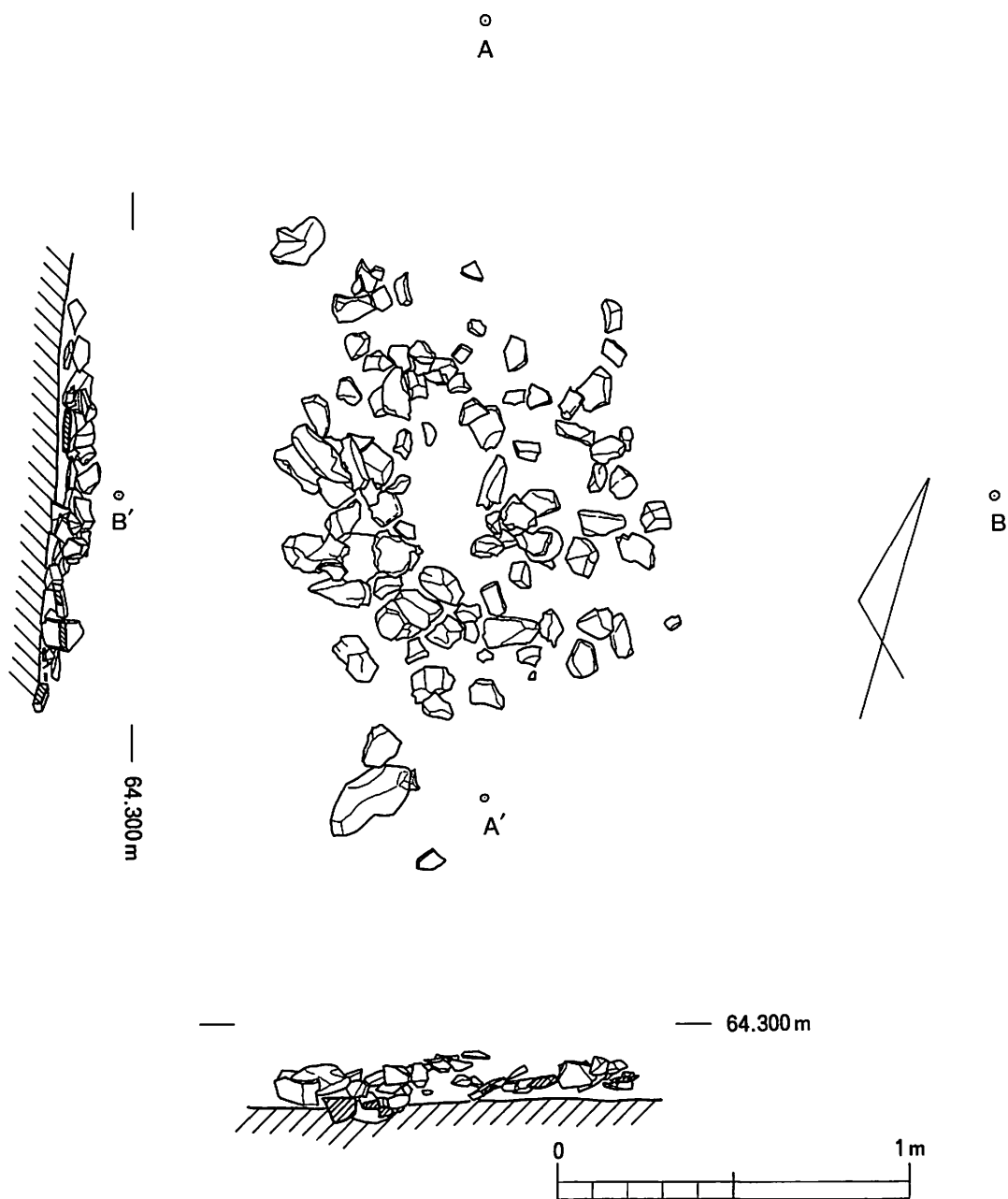
2条の溝が確認できた。1号溝は北東－南西方向に走っており、幅2m、深さ約40cmで
ある。底は凝灰岩を丁寧に整形して平らにしており、法面はほぼ垂直に立っている。埋土
中から、青磁の高台・染付・火舎の脚部・すり鉢などが出土した。

2号溝は、南東方向からひらがなの「し」型に延びている。幅0.7～1.5mで深さは10～
18cmと非常に浅い。土師器・染付・すり鉢などの小片がわずかに出土。

2号溝は1号溝に切られており、1号溝よりも古い溝である。

②集 石（第8図）

1号溝の北側に1基確認された。掘り込みは確認できなかったが約70個の礫が集中しており、礫の間には土師器・青磁・瓦器などの小片が含まれていた。



第8図 集石実測図

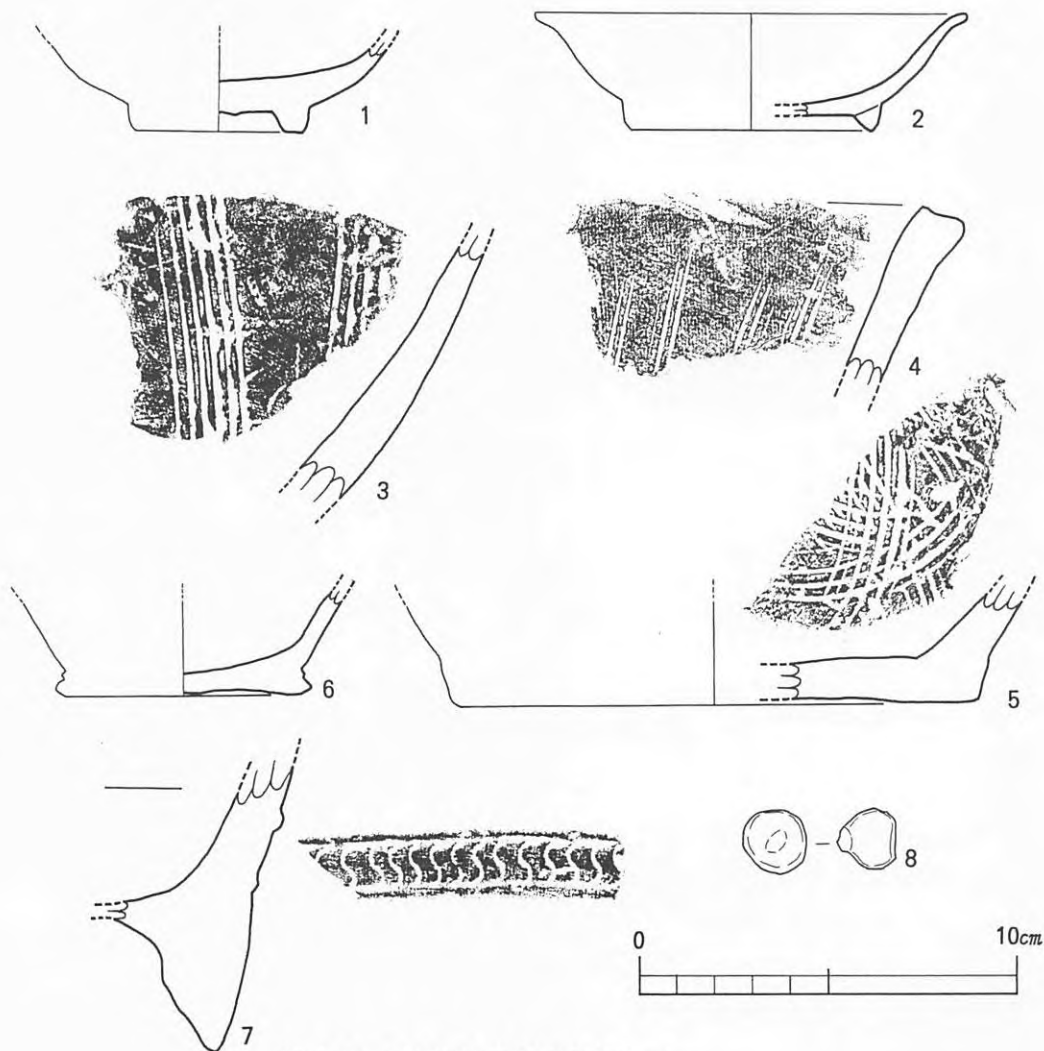
(2)遺 物 (第9・10図)

溝や集石の中から白磁・青磁・土師器・瓦質土器などが出土した。

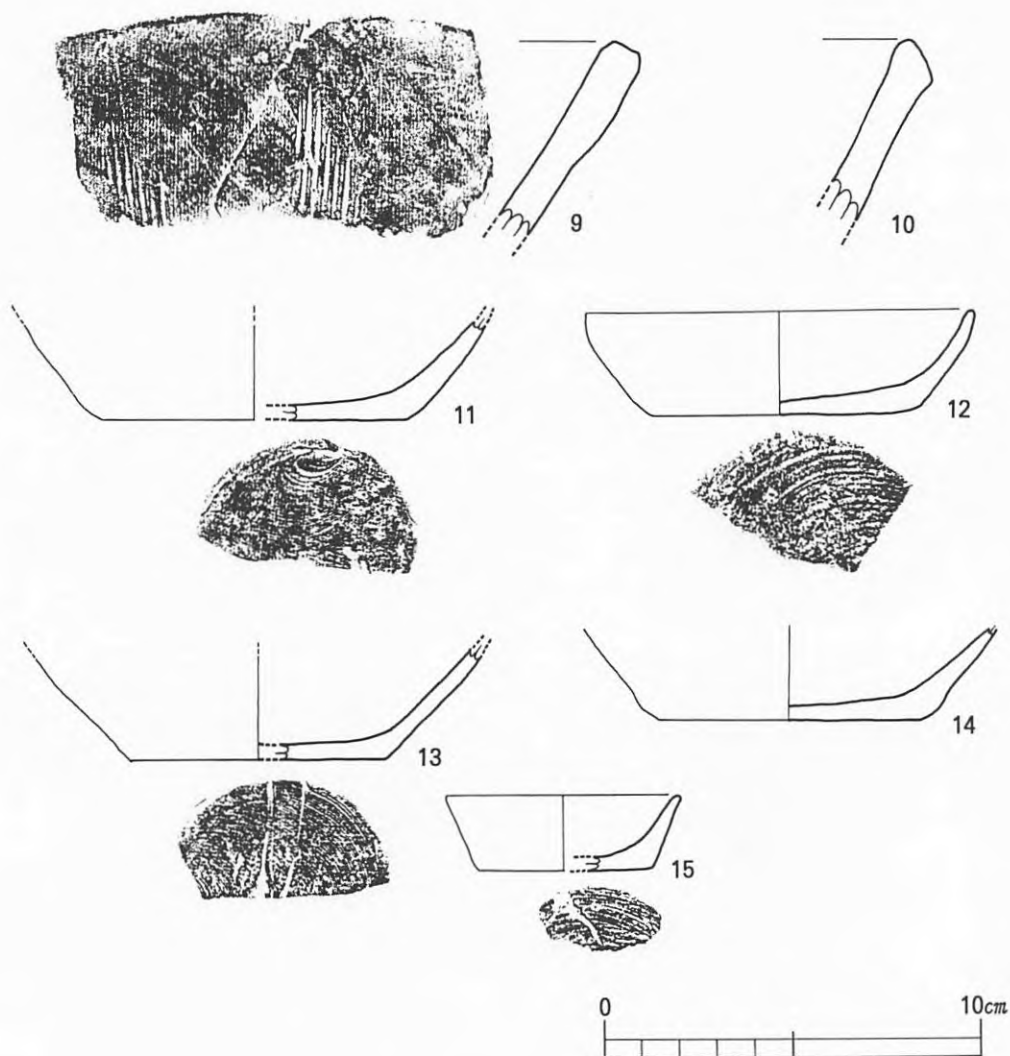
1は青磁碗の高台部である。見込み部および畳付き部から高台の内側以外には、淡い青白色の釉がかけられている。高台径4.6cm、高台高0.5cm。

2は白磁碗。全体の約5分の1を残し、推定口径11.4cm、推定器高3.1cm、高台径6.4cm、高台高0.4cm。外面に焼成の際にできたと思われる気泡の穴が多く見られる。高台部は接合が悪かったのか、内側にヒビが入っている。

3～5はすり鉢。3は胴部で、内面には6本単位の条線がくっきりと残っている。4は口縁部。条線が残っているが、破片が小さいため単位までは解らない。5は底部で、推定



第9図 II区出土遺物実測図一 1



第10図 II区出土遺物実測図－2

径14cm。内部には条線が深く刻まれている。

6は土師器の皿で、底部の推定径6.2cm。底部・体部の境の整形が成されておらず、凸凹している。底部整形は不明。

7は火舎の脚部。赤褐色で、底部近くにS字状の刻印が押されている。

8は鉛製の鉄砲玉。片方がやや潰れている。径1.5～1.7cmで重量17.5g。

9からは集石中よりの出土遺物である。

9・10は瓦質のすり鉢の口縁部。いずれも灰色で、9の内部には6条単位の条線が残っている。

11～15は土師器の皿である。11は推定底径6.8cmで、淡い肌色をしており、底部からやや丸味を帯びて立上がる。底部の整形は不明。12は推定口径10.2cm、器高2.7cm、推定底径6.2cm。焼成はあまり良くなく、砂粒を多量に含む。底部からやや丸味を帯びて立上がり、口縁部はやや内湾する。底は糸切り底。13は推定底径6.8cm、淡い肌色で、底部から直線的に立上がる。底は糸切り底。14は推定底径6.8cm。底部からやや丸味を帯びて立上がり、底部の整形は不明。15は推定口径6.2cm、器高2cm、推定底部4.4cmと他のものと比べると小さい。やや赤味を帯びており、底は糸切り底。

第Ⅲ章 ま と め

今年も新たな発見があった。石竈・石切り場がそれで、特に石竈については熊本県内に約600あるといわれている中世城では、初めての発見である。

石竈は半ば埋まった状態にあり、全体が雑草に覆われていたことと併せて、担当者の不勉強もあり崖面に掘られている横穴墓とは異なるとの判断で、以前から地元でイモ穴として使われていたということを鵜呑みにして完全に無視していた。専門調査委員にも手前に掘られている遺構（後に石切り場と判明した遺構）の件で調査をお願いした訳だが横穴について、何らかの遺構ではないかと指摘を受け、調査を行った次第である。その結果、宗教的遺構と思われるという結論を得た。そこで、このような遺構などに詳しい大三輪龍彦鶴見大学教授を招いて検討していただいたところ、形状からいって2基とも石竈といっているのではないかと、また、2号石竈の前部に掘られている遺構については、当初同一遺構と見る向きもあったが調整痕が異なるので別々の遺構であり、石切り場であるという見解であった。その後調査いただいた岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授も、同意見であった。その後、石切り場について精査してみると、矢（クサビ）の痕と思われるものが多数検出された。幅約3.5cmの工具痕が約15cm間隔で整然と並んでいる。これは最後に岩盤から切り離す際の工具痕で、これとは別に縦方向に打ち込まれた痕も残っており、約70cm幅の石を切りだしたことがわかった。しかし、8年間の調査で凝灰岩を用いた遺物は何ら出土しておらず、何のために切りだしたのかは今後の調査を待たねばならない。

次に、遺構の前後関係を検討してみると、石切り場は2号石竈を削平して作られておりまた、石切り場が埋められた後に柱列が作られているので、石竈→石切り場→柱穴という順番に作られていったことは明らかで三時期が考えられた。製作時代をみても、石竈は形状から古代までは遡らないということであり、柱穴は昨年度までに確認されたものと同様と思われ落城間近の遺構と考えられるので、いずれも中世の遺構と考えてよさそうである。石竈の性格を考えてみると、掘られているところは城全体から判断すると南西方向になり、方位からみると裏鬼門に当たるため、何らかの宗教的意味合いを含めてこの場所に掘られた可能性も考えられる。

ここ数年、『辺春・和仁仕寄陣取図』に従って田中城跡の西側斜面の調査を重点的に行っている。昨年度は、23列にもおよぶ柱列群が確認されたが、未だこの遺構の性格は不明である。しかし、福岡市教育委員会が昨年度調査した遺跡でも、類似した柱列群が確認されているということを教えていただき、今後も同様な遺構の確認がなされ、性格について解明されていくことであろうと、意を強くしているところである。

(1) I 区調査前（東より）

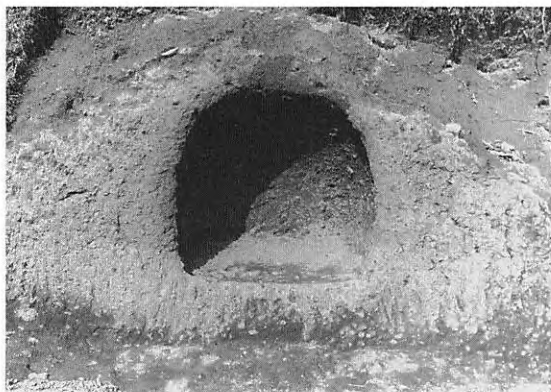


(2) I 区柱列発掘状況（北東より）

(3) I 区遺構発掘状況
（古い方の遺構）



(4) I 区白磁出土状況



(1) 1号石竈（南西より）



(2) 2号石竈（南より）



(3) 2号石竈と石切り場（南より）



(4) 石切り場（西より）

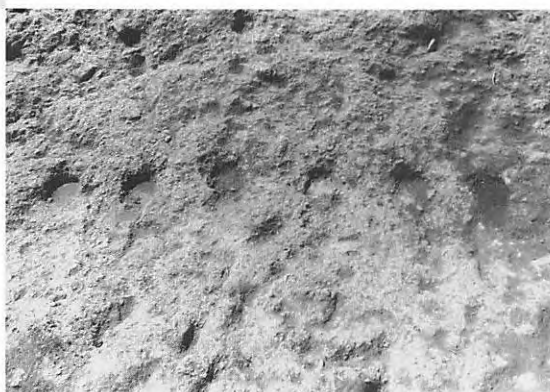
(1)石切り場の切り出し状況



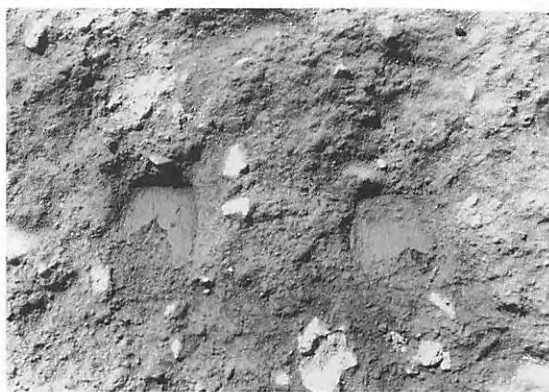
(2)石切り場の壁面調整



(3)石切り場の工具痕



(4)石切り場の工具痕





(1)Ⅱ区調査前（北より）



(2)Ⅱ区遺構発掘状況（北より）



(3)Ⅱ区集石検出状況（北より）



(4)Ⅱ区青磁出土状況

三加和町文化財調査報告 第8集

田 中 城 跡 VIII

1994年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会
〒861-09

熊本県玉名郡三加和町板楠76

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー
〒862 熊本市鹿埴瀬町496-1

